

n
KrauserxLeon
&
SaddlerxLeon



R-18G

if	if	その果て	07	06	05	04	03	02	01	n
02	...	...	...	...	...	...	...	...	...	
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	
...	199	...	147	125	88	67	38	19	04	
253		...								
		171								

GC版からアップデート出来ていない婆、2024年9月末の蕨マです。
来年まで待てば、晴れて20周年記念になったんですけど企画して
早1年半が過ぎ去ろうとしているのでいい加減発行に踏み切ろう
と思った次第でございます。

思えば4をプレイする為だけにGCを購入して発売日に齧り付きで
夜明かししたのも遠い日です。>当時はゲーム内ムービーの再生
機能すらなく録画しながらのプレイでした…。

初出の設定ではクラウドはエージェントの相棒、と言う設定で
この兄弟ホモハンターの何の食指を動かしたのか今でも謎ですが
兎も角あの頃は……

はい、レオンがあまりに可愛すぎて虐めなくなっちゃったのが
真相でございます。

ただあまりに可愛くて、当時の幻の広告アオリの”何度でも死ねば
いい”を地でいく結果となりまして…

当時は片手で数えられる数のサイトしかなかったクラレオですが
目を離している隙に他所のクラウドが湧いたりジャンル違いの
クラレオが出てきたり色々あったけど、やっぱり好きだなあと言う
感想が出てきます。

公開中の小説を再録するにあたって書(描)きおろしの漫画と小説
を添えて、次ページからn(旧題”奈落の方へ”)、楽しんでいただけ
たら幸いです。



写真付きの報告書を手渡されたとき、僅かだがクラウドザーの表情が曇った。多少予測していたとはいえ、そこに記された名にかつての記憶を馳せずにはいられなかった。

「やはり旧知の間柄か、クラウドザー」

偽りの主の口角が吊り上がり、クラウドザーの視界の端で愉しげに笑う。

「……ああ、まあ……」

煮え切らぬ答えを漏らし、クラウドザーは今一度、写真の中の男を一瞥した。自分がエージェントと呼ばれる職に在った頃、彼とはパートナーだった。

もう2年も前の話だ。恐らく、相手は自分を死んだと思っているだろう。姿を現したら幽霊だとも思われるか？

否、多分自分の期待を裏切らない反応を示すだろう。そうなくては成らない。写真を伏せた瞬間、彼への思いはクラウドザーの中から払拭された。

思い出はあるが想いを馳せる相手ではない、そう自らに言い聞かせるとき、クラウドザーは改めて今の自分の信念と理想、そして目的を再確認するのだ。

いつか、この感情を後ろめたくねじ伏せる努力も必要無くなればいいと思う程に強く。

1.

レオンが銃口を降ろすのと、人程の大きさの奇怪な虫がぐずぐず音を立てて崩れていくのはほぼ同時で、次の瞬間には息を潜めて周囲に残る気配を探した。此処はどうやらステルス能力を駆使する厄介なクリーチャーの巣窟で、5、6匹も仕留めた後でもまだ油断は出来なかった。群れて行動するのか、それとも単独で行動する生物なのか。

兎も角限られた弾薬を一つも無駄撃ちしたくはなかったレオンは、他に気配が存在しないことを確認すると新手が来る前に素早く行動することにした。

あの虫がいつから此処に住み着いているのかは実際解らないが、本来の使い方は別にある。見渡せば直ぐに推測がつくこの場所は、地下牢としての役割が備わっていたようだ。実際、狭い独房のひとつにはまだ新しい死体が残っていて、少なくとも最近まで囚人の出入りがあったのは間違いない。

彼が本当に『罪人』だったのかは、今はもう知る術もないが…。

見る限り、使用されていた独房は死体の残るひとつだけであって、他は蛻の殻だった。当然、アシュリーが捕らえられた仕掛けも無い。おそらく此処に用はない。

脳がそう決めつけたのと彼の信用できる勘が違和感を覚えたのは同時だった。

「……」

二つ、鉄格子の開かない独房があった。

ひとつは錆び付いたうえに扉も歪んで、どうあってもレオンの力では開きそうになかった。けれど、もうひとつの扉は継ぎ目に銃弾を浴びせれば開きそうだった。

レオンはショットガンを構えると、扉の枠に照準を合わせて引き金を引いた。ギーンと重い手応えの音を立て、格子扉の枠の間に隙間が出来た。ゆっくり手を前に押し出すと、僅かの軋みを引きずって鉄格子の扉が開いた。

多少強引に開いてはみたが、しかし、中へ踏み込んで尚、他の独房との違いは見当たらない。それなのに、違和感だけが強くなる。

さあ、集中しろよ、レオン

自分にそう言い聞かせる。悠長にしている暇はない。何も無いなら、此处に留まるのもあと10秒が限界だ。またいつ新手のクリチャーが投入されるかわからないんだぞ

心で今置かれている状況を反芻し、冷静さを取り戻そうと努めたとき、煮え切らぬ違和感を拭う突破口が見えた。文字通りの「ミズレ」を見つけた。

頑丈な石壁を構成するブロックは僅かの隙間もなく積み上げられ、粘土で塗り固められている。けれど、ベッド脇の一部に3mm程削られて新たに組み上げられた部位を見つけたのだ。それが目印に成るのは必然だったが、巧妙にも低いベッドから落ちる影が、意図的に狂わせたラインを隠している。屈み込むと腰に取り付けたライトが煌々とそれを照らした。

レオンの勘が騒ぐ正体は、どうやらこれで間違いないさそうだった。ナイフの切っ先を隙間に突っ込み穿るようにして脆いブロックを崩した。

一つ目を抉り出すようにして、手前にナイフで押し出すと、壁の向こうが空洞になっているのが分かった。

二つ目は手を突っ込んで引き抜く。すると横幅40cm程の穴が開いた。

肘あたりまで腕を突っ込むと、何かの取っ手が指に引っ掛かった。レオンは躊躇いなく引っ張り出す。ごとりと音を立てて出てきた物は、小型のジュラルミンケースだった。

レオンはふと、ある事を思い出した。

違和感の元はこれか。

彼はサイドバックのひとつに手を伸ばした。指を突っ込んでまさぐると、冷たい金属の感触が指先にぶつかる。それを人差し指と中指でつまんで取り出した。

「……」

タグも無く、簡素な作りの極ありふれた鍵だった。

これを入力した経緯を思い起こすと、あの男の顔が思い浮かぶ。

ルイスと名乗り、口から出任せに「元警官」と自分の経歴を語った彼。後ろ手に互いに拘束された後、ガナードの斧で手枷を断ち切る瞬間、レオンの掌にねじ込まれたのがこのキーだった。結局その後の2回の接触中にこのキーに託された真相を聞く間も与えられず、今に至る。どういふつもりでこれをレオンに渡したのか。

そして、一体何なのか。

その答えがどうやら少しは此処で判明しそうだった。

レオンは躊躇いもなくケースの鍵穴にそれを差し込んだ。

手応えは――あった。

錠の外れる軽い金属音が地下に響く。

その音こそが、この先レオンを二度と引き返せない道へと追い遣る死刑宣告の其れに等しいとも知らずに。

レオンは床の上に寝かせて置いたケースの蓋の両脇に手を置いて、ゆっくりそれを開いた。黒いスポンジのクッション材に守られたそれを、レオンはそつと手に取った。

「…これは…」

レオンの表情に、一瞬だけ途惑いの色が滲んだ。

あの時、彼は「神を信じてはいない」と答えた。同僚達が日曜日のミサの時間に必ず寮から姿を消すときも、何時だって彼はそれに倣ったりなどしなかったのを知っていて問うたのだ。週末の、絵に描いたように清々しい午前中のふしだらな二人は肌寒い日陰で互いの足を絡めていた。床には彼が買ってきたチープなダブルチーズバーガーの匂いを漂わせる紙袋を放り出したまま、獣のように衝動的でありながら、獣なら有り得ない、ただの欲求の捌け口の為のセックスをした。

長期の任務中に性欲処理に抱いたことなら何度かあったが、限られた休日のプライベートな時間を共にしたのは、その一度きりだけだった。

偶然部屋の外で出会^{でくわ}し、二言三言言葉を交わすうちに、しんと静まりかえった通路の白々しい程の清潔さが妙に気分を高揚させて、背徳感を催淫剤に猥らでみつともなく二人は纏れあった。壁を背にした彼の足を抱え上げて執拗に突いてやると、息も絶え絶えに喘いでみせる。

ふと彼の答えの真意を聞きたくなり、最中にも関わらず先程の続きを要求すると、悦楽に酔いながらそれでも律儀に彼は答えた。「何故かって？…神が存在するって言うのなら、別に無下に否定はしない。けれど、俺は何かをしてもらいたいとも思わない。期待なんてしてないし、信用しない」

「お前には、運命の中の偶然の確率よりも劣る存在か」

「なにか助けをくれる存在だっていうなら、俺は今頃田舎町で警官だったはずだ」

「？」

「神が導きをくれるなら、俺がラクーンシティに配属願いを出したときに『それはやめておけ』ってお告げをくれたはずだ。…こんなクソツタレな道を引き返せなくなる前にな」

吐き捨てるように呟き、それきり彼は黙って、自分を抱く男の首に腕を回してしがみついただけだった。

彼の個人的なデータを知る気も無かった自分にとって、其れが唯一、レオン・S・ケネディという男の思考を垣間見る事が出来た瞬間だった。

同僚で、その腕を信頼はするがそれ以上でも以下でもなく、何度かセックスした相手、ただそれだけだった。

……

なぜそんな事を急に思い出したのか。

クラウドは「下らない」と一言で一蹴した。

磨き上げたナイフに映る自分の顔を眺めて、2年振りの再会に感傷的になったのかと己の目を見て嘲笑した。次にあつたときは息の根を止めてやる。あの女共々な。

覚悟しておけ、と、無機質なコンクリート壁に拳を置いて何処かに身を潜めるレオンを思った。

2.

セキュリティの壁に阻まれ、エイダですら進入不可能だと言っていた通路の前まで足を運んで、クラウドは立ち止まった。はつきり言ってしまうば、もうサドラーの命令を聞く気は殆ど失せてしまっていた。信用を置かれてないと感じて以来、独断での行動に踏み切りつつある。あの時レオンと対峙したのは彼がアンブレラと因縁浅からぬ存在であつたが為に、動機としてはウエスカーの計画の邪魔になる前に始末したかったからだ。

サドラーの命は、言わば『ついで』だった。

あの狂った教祖の元へ再び姿を見せるつもりは無くクラウドは再度独断でレオンと相見えるつもりで着々と計画を企てていたのだが、突然無線機が彼の鼓膜をけたたましい高音で震わせた。

勿論『それ』を無視することは出来た。

けれど、所謂『厭な予感』が、直感となつて彼の心を刺激した。スピーカーの奥のサドラーの声音は何処か嬉々としていて、それが癪に障つたのもあつた。

このままサンプルを奪取できず帰還するハメになったら――

その可能性も色濃い今、自分の計画を阻む何もかもが腹立たしく、半ばヤケになってクラウドザーはサドラーの元へ馳せ参じたのだった。

ロック解除された電子扉は、あれ程自分達の進入を拒んだのが嘘のようにあっさり開いた。

「お呼びですか」

部屋に入るなりクラウドザーは毅然とした態度で（心中は無然として）手を後ろに組み、自分を呼び出した主に問うた。その声に、仰々しいローブを纏いこちらに背を向けていた男が、手にした杖をカツンと床で一度だけ打ち鳴らして肩越しに振り向いた。

「おお、待っていたぞ」

何がそんなに愉しい、クソつたれ――

愉悅の表情で待ち受けていたサドラーに、クラウドザーは心の内で吐き捨てた。

サドラーは「ふうむ」と呟くと、クサるクラウドザーの心境など構いもせず、

「いいものを見せてやろうと思つてな。これでお前の手間が省けるぞ」

ついてこい、と言われ渋々クラウドザーはサドラーの後に続いた。

小部屋の奥には更に通路が存在し、教祖の間と同じく赤外線レーザーのトラップが仕掛けられていた。

サドラーは時代錯誤の教団を従える割に最先端テクノロジーへの知識が長けているようで、自分の根城はこういったシステムを駆使して守り続けていた。そしてその所為で迂闊にサンプルの在処を探ることさえ出来ない。

クラウドザーは歯ぎしりしたい気持ちだった。

網膜パターン認識タイプのロックを解除し、トラップの作動を停止する。サドラーはローブを引きずりながら堅牢な要塞の通路をクラウドザーを従え歩みを進めた。シュン、と空気を切るような音を立てて開いた扉の先は、異様な光景だった。

視界がクリアとは言えないガラス壁はマジックミラーだろうか。その奥の空間は丁度一階分程掘り下げる形で造られ、クラウドザーはそれを覗き込むように見下ろす。

見えるのは、中世の拷問部屋のような石造りの薄暗い部屋だった。扉だけが最新型のセキュリティドアのようだ。今サドラー達の立つ操作盤とモニタがいくつも並ぶ部屋と、隣の時代がかった重々しい空間、そのギャップが滑稽でならない。

そう思えるのは、今日の前にある空間こそが、サドラーが手にしようとしているアンバランスな妄想の具現化だからかもしれない。

クラウザーは訝しげな表情を浮かべ、目を凝らした。マジックミラー越しの眼下の部屋には、扉の前に待機する4名の兵士と、島の向こうの城にいた教団の装束を纏った教徒が6人――

一体なんだっていうんだ？

未だ真意を汲み取れないクラウザーは、更なる観察で呼吸の止まる思いをした。

教徒の囲む中央には彼等の腰程の高さの石壇が横たわっていて、その上に誰かが仰向けに寝かしつけられている。時々藻掻くそれを4人掛かりで四方から押さえつけているようだ。

それが誰かなど、言うまでもない――

咄嗟に声を発しそうになったクラウザーの横で、サドラーがタッチパネルを操作すると兵士の一人がこちらに気が付いた。どうやらインカムのスイッチらしい。

「…これは…」

絞り出すようにクラウザー呟く。

本当は問うまでも無かった。

一応の抵抗は見せるものの、既に衣服もぼろぼろで、酷く憔悴しきった――レオンが其処に居る。

一体何時からあの状態なのだろうか、とクラウザーは思う。恐らく彼は既に数時間を費やし兵士達にレイプされたのだろう。

着衣の汚れでそれは一目瞭然だった。

確かに、レオンの性格では、割り切ることも出来ず無駄な抵抗を繰り返したに違いない。例え更なる追い打ちを受けようとも、ああいった屈服を良しとしない性格では絶対に相手に折れたり等はしない。

共にエージェントとして活動していたときにも、彼は度々『厄介』に巻き込まれていたが、あの性格が仇となった場面を何度もクラウザーは見ていた。

つくづく要領の悪い男だ、と思う。

ただ、何故今更こんな仕打ちをレオンが与えられているのかが腑に落ちなかった。

「奴は一体…」

「知りたいか？」

サドラーが笑ってクラウザーを一瞥した。

「奴はサンプルを持っていたようだ」

「!?」

思わず目を見開いてサドラーの顔を凝視してしまった。

「危うく見逃すところだったが、既の処を捕らえた。まさか奴の手にサンプルが渡っていたとは思っても依らなかったからな」
しかし、クラウザーは同時にこうも思った。

レオンは、既にサンプルを破棄しているのではないかと。

それは、彼がラクーンシティで取った行動を、人伝に聞いていたからこそ。そして実際知るレオンの為人を思えば、それは恐らく間違いないのでは、と妙な確信を覚えていた。

「——吐いたのですか？」

「いいや、ああやつてもう3時間は粘っておるよ」

サドラーは薄目でレオンを見つめた。

道理で酷い衰弱振りだと、クラウザーは思った。男は射精させ続けて死に至らしめることも可能なのだ。もしも3時間以上も犯され続けているならば、レオンの限界は近いだろう。

「奴の運は最初から尽きていたようだ。ルイスに目をつけられ等しなければ、あるいは逃げ切れたかもしれんのだ。まあ、プラーガが寄生している限りそれも悪足掻きに過ぎんが」

ルイス、という名にクラウザーは憶えがあった。ロス・イルミナドス教団の専属科学者だった男で、エイダが逃亡の手引きをした。尤も、既に死亡しているが。

仮にその脱走が成功していればクラウドザー達は易々とサンプルを入手することが可能だった筈だ。手間を増やしやがって。

クラウドザーは心中で死者に毒づいた。

しかし、そうなればルイスは初めから自分達にもサンプルを渡す気はなかったのかもしれない。

良心の呵責に耐えかね教団を抜ける気だったならば、それも無い話ではないだろう。

第三組織等とサドラーに大っぴらに公言されては、奪った後のサンプルの『使い道』を勘ぐられても仕方ない。

となれば、唯一望みを託せる相手はレオンだけということになる。

少なくとも、彼の手に渡っても悪用だけはされないだろう。しかし結果として、結局自分の手でサンプルを破壊しなかったルイスの小心は、己の命のみならず、レオンの自由すら奪ってしまったらしい。サンプルがいくつか存在するとは思っていたが、恐らくそのうちの一本への期待は諦めた方がいいだろう。クラウドザーは平静を装ってサドラーに意見した。

「：奴にサンプルの在処を吐かせるおつもりならば、もっと時間を掛けるべきかと。まがりなりにも、あれは私の知るエージェントの中でも優秀な部類に入ります。急いても恐らく結果は得られないかと――」

「それは気に病むべくもない」

サドラーはからからと笑った。

「それはもう承知済みだ、クラウドザー。此処に連れてくるまで、10人程のガードに相手させてみたがそれでも奴は陥ちなかったよ」

「やはり……」

「だが、吐かないならそれも構わん」

「？」

サドラーの笑みが急に冷え冷えとした。

「私は奴の頑なさを気に入ったのだよ。あの程度でくたばられては面白くない」

サドラーはインカムのスイッチを押しながら、マイクに向かって命じた。

『そろそろ始めろ』

待機していたガナード兵が頷くと、何事かを教団員に告げるのが見えた。

これ以上の拷問は意味を成さぬと忠告した矢先に、一体何をするつもりなのか見当も付かないクラウドザーは、怪訝そうにサドラーを見た。その視線に気付いたサドラーはよく見ておけと勿体つける。

「サンプルを渡す気が無いなら、それも良いだろう。ならば二度と此処から出られぬようにしてしまえば良いだけの事よ」

その意味を問うクラウドザーに耳を貸す間も無く、サドラーは更に制御パネルを操作した。それまで音の無かった室内に、ふいに言葉が溢れる。上部に取り付けられたスピーカーから、階下のガナード達が話すスペイン語が流れてきたのだ。ぼそぼそと幾人もの声が聞こえる中、サドラーは母国語でインカムマイクに再び命令を下した。教団員が動いた。

そして――

「――止めろ!!」

それまで抵抗の力すら奪われてしまったようにぐったりしていたレオンの震える叫び声が響いた。物々しい雰囲気にも包まれた室内。クラウドザーは目を疑った。

「:!!?」

「愉しめ、クラウドザー。またとない見せ物だ」

サドラーの歪んだ笑みが、背筋を凍らせる。

押さえつけるガナードの指が食い込む程強くホールドされても尚、レオンは必死に最後の抵抗を見せた。振る肩を押さえられ完全に動きを封じられてしまった軀は、それでも望みを捨てきれず、ガナードの力に反発する。

同じ立場なら、自分だってそうするに違いない――

クラウドザーは息することも忘れ、無意識に拳を強く握っていた。

レオンにゆっくり歩み寄る教団員の手にしているそれは、錆び付いた重々しい斧。それが静かに頭上に持ち上がり、実際の何倍もの長さでその瞬間が訪れる。

レオンの畏れを内包した瞳が、一瞬だけこちらをみた。あの青い目が、信念を失う瞬間を初めて見た。

「やめ……て、くれ……」

虫の息で呟いた懇願がレオンの喉から絞りだされるが、誰一人それを理解するものはその場に存在せず、勿論サドラーがそれを聞き入れる筈もない。近づけられた緋色の焼き鏝の咽せるほどの高温が空気すら滾らせ、赤く血で滑る傷口を舐めるように嘯る。まるで陸に揚げられた魚のようにレオンは息も出来ずただ口をぱくぱくと開いて酸素を渴望する。

思わずクラウザーはサドラーに意見した。辛うじて残った理性が、肩を掴むのを留まらせた。

「ショック死します！」

「案ずるな。あれは私の期待に応えるよ」

叫び声——すら、無かった。

耐え難い激痛が、レオンの背骨を撓らせた。目を見開き、声もなく喘ぎ、自分の意志すら無関係にびくびくと痙攣するレオンの軀。剥き出しの肉を、想像をも絶する温度の熱で焼かれる痛みに、彼はついに意識を手放した。

張り詰めた残りの筋肉が力を失い、レオンはぐたりと横たわった。

思わずクラウザーは目を逸らした。きつとあの場は得も言われぬ悪臭に満ちているだろう。

咽せるような血の臭いと、人の肉の焼けた匂い。そしてガナード達の醸し出す狂人の匂い。

——吐きそうだ

だが、なにひとつ悪夢は終わっていない。レオンの受け入れなければならない現実、これからだった。

失神したレオンの顔めがけて、ガナード兵が水を大量に浴びせた。

「ゲホッ、ゲホッ」

それを空気と一緒にもろに気管に吸い込んで、レオンは咽せて胸板を上下させた。それでもそのまま呆けた表情で、彼は殆ど動かない。あまりのショックに茫然自失となってしまっているように見える。しかし、時間を置くにつれ未だ拘束されたままの状態に気付くと、再び恐怖に表情を引き攣らせた。

「なん……で……」

軀ががくがくと震える。それを合図に、レオンの残りの腕と両足が強く押さえつけられた。

「うあああああああああ！……！！！」

絶叫がスピーカーを震わせた。怯えの声音が彼の限界を伝える。

クラウザーはそれでも平静を装ってサドラーに問うた。

「…まさか左腕も落とす気ですか？」

ところが、サドラーは思いもしなかった驚きを滲ませてクラウザーを見返す。

「左腕？とんでもない。全てだ、クラウザー」

「…全て…？」

「四肢全てを、だ」

クラウザーは、その瞬間のサドラーの表情を生涯忘れないだろう。本物の氣^{きち}狂いの恍惚とした笑みを。

クラウザーは今度こそ嘔吐感に襲われる。胸が悪くなる。よくもそんな外道な事を思いつく。狂った毒氣にあてられそうでもうこんな処には居たくなかった。

レオンは死に物狂いで抵抗を見せた。右腕を失う瞬間の恐怖が再び彼の脳裏に過^へぎり、残りの力全てを奮ってそれをさせまいと抵抗する。例え無駄だと分かっている。

縋る希望も見えないレオンは、今一度味わう絶望をそうして迎えた。

ガナードが斧を振りかぶる瞬間に、クラウザーは背を向けた。

「…悪趣味にも程がある」

あくまで平常心を保った素振りでサドラーに批難の捨て台詞を吐くと、クラウザーは「下がらせてもらいます」とだけ告げ、同時に歩み出していた。クラウザーは出来れば走り去りたかった。それでも、幾ばくかの意地でそれを踏み留まる。しかし、それを後悔させられるのは一秒足らずの後だった。

「——ッ…ク」

空耳かもしれない。

しかし、クラウザーは背中にじつりと冷たい汗が滲むのを自覚した。

今此処に自分が居ること等、知る由もない癖に。

レオンは悲鳴とも呼べぬ悲痛な声で、確かに呼んだのだ。

はつ、と、喉に支つかえた息を吐き出すのがやつとだった。クラウザーは、もう立ち止まることも出来ずその場を退室した。その姿が消えた後、サドラーは愉快そうに吐き捨てる。

愉悅の表情を湛えたまま、サドラーはじつとレオンを見つめた。ついに左腕さえ奪われたレオンの様を、うっとり目と目を細め眺める。失血死を防ぐ為もう一本の焼き鋺が用意されたのを見て、レオンは顔を背け、またしても与えられる激烈な苦痛に耐えようと必死に歯を食いしばっている。

「ああ……ああ……」

「あつ、あアア――――！！！！」

今度こそ、レオンの意識は完全に途絶えた。耐え難い痛み流した汗と浴びせられた水で、前髪はじつとりと濡れ頬に張り

この先のレオンに与える処遇を、一人夢想しながら。